

図92 出土石器

挿図番号	名称	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石材	被熱	備考
図92-1	石 鏃	KO36	3	2.29	1.21	0.44	0.9	めのう		
図92-2	スクレイパー類	KO35	3	8.50	3.32	0.77	19.2	頁岩		
図92-3	スクレイパー類	KO36	3	8.96	7.32	1.69	104.1	頁岩		
図92-4	スクレイパー類	KO36	3	7.29	4.29	1.27	29.5	頁岩		
図92-5	スクレイパー類	KO36	3	6.83	7.73	0.95	46.8	頁岩		
図92-6	三脚石器	KQ31	3	5.61	6.39	2.14	56.2	砂岩		

表8 出土石器観察表

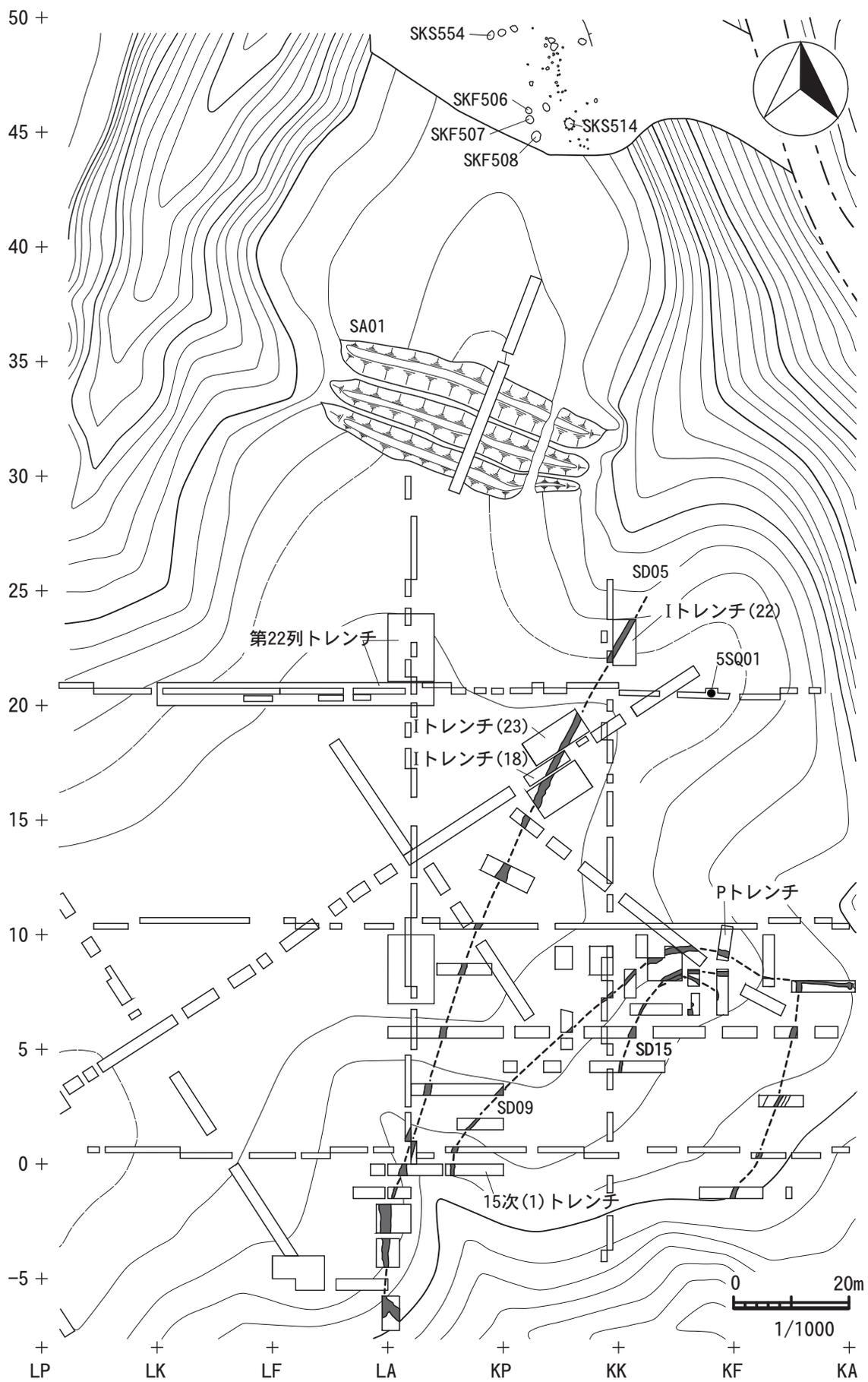


図93 エリア①-3の遺構分布図

## 2. 土坑

舌状台地の先端からは土坑が検出されていて、フラスコ状土坑が集中している(図93)。

SKS514は土坑の周囲にピットが配置している(図93)。ピットは直径20cmで、約1m間隔でつくられていて、土坑に上屋を架けていた可能性が考えられる(秋田県教委1999)。

SKS514 から北西へ19m離れたSKS554とその周辺(グリッドKO47~KP47)からは、大形の土製品が出土している(図95-1~7)。これらは胎土や焼成から同一個体と考えられるが、接合関係は掴めなかった。

1はグリッドKL48から出土したものである。口縁部の破片で、器厚は最も厚いところで4.5cmを測る。扁平な粘土を2~3枚重ねて器壁を形成しているが、厚いため非常に脆い。表面には十腰内I式古段階の特徴的な8字状の突起が貼り付けられている。10cm間隔で孔を穿っている。隆帯間には豆粒状の隆帯が付けられる。これは深鉢の刺突文を模した表現かもしれない。2は1と同様の部位で、内面は剥落している。3も口縁部付近の部位で、直径1.5cmの孔が貫通していることから、1と同じ部位と考えられる。4も口縁部に近い部位である。隆帯で渦巻状の文様を形成している。

5は表面の下半部・裏面の上半部が剥落しているもので、部位は想定しがたい。

6は実測部で背面にあたる部分が平坦で底面と考えられる。カマドの袖のような形状で、拳大の粘土塊に扁平な粘土板を囲い、製作している。渦巻状の文様が施されている。7は表面の文様が剥落しているが、6と同じ部位である。

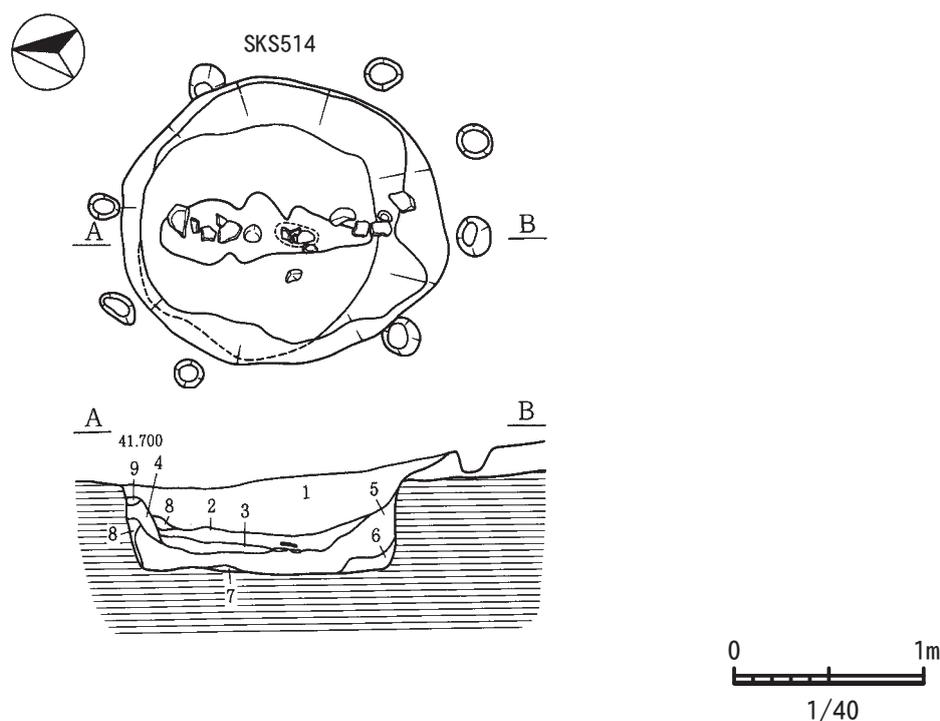


図94 SK514 平面図・断面図

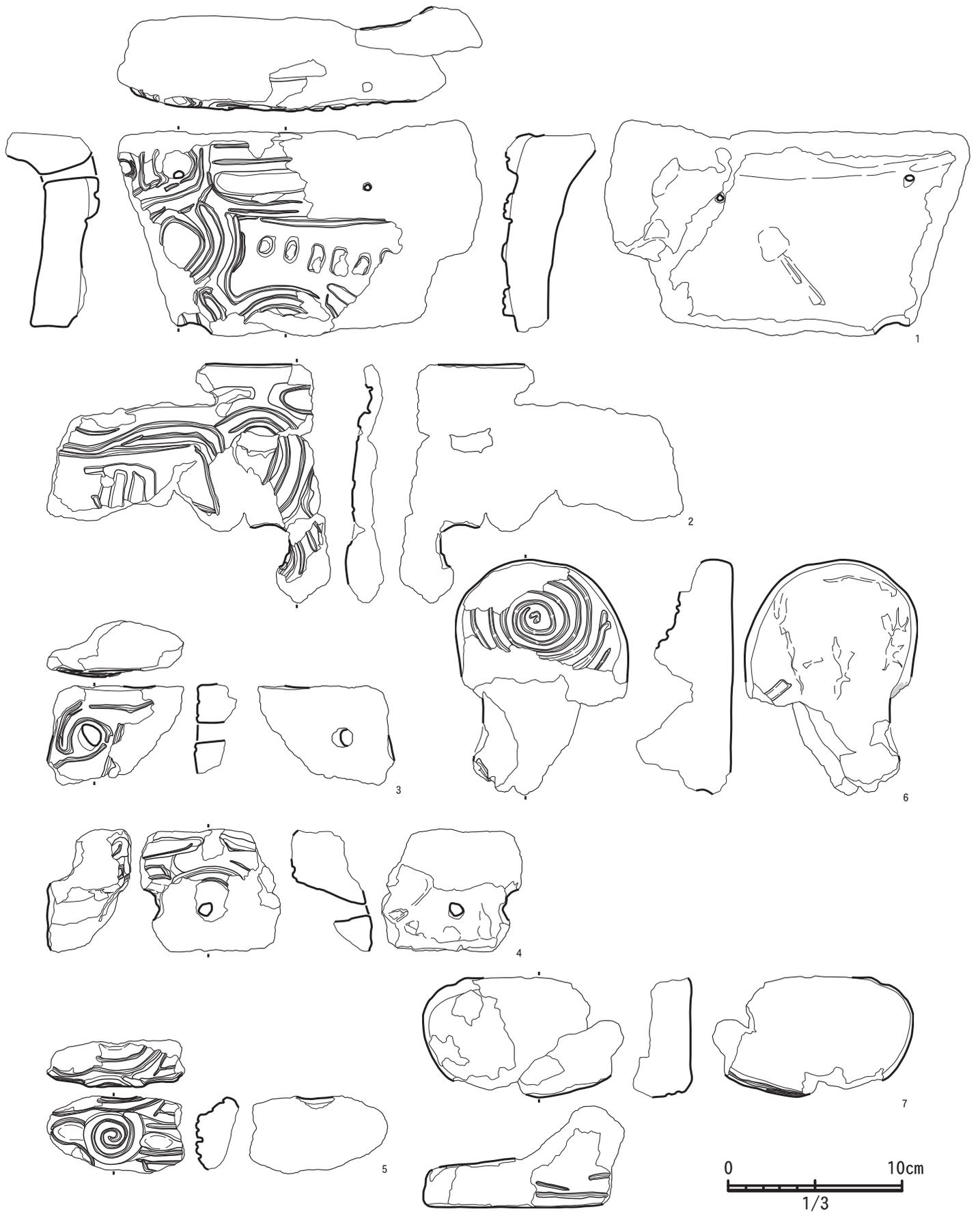


図95 ゾーン①-3 出土土製品

### 3. 集石遺構

5SQ01はグリッドKG20に位置している(図96)。直径約5～20cmの円礫を円形に集積したもので、I～II層で出土しており、表土から露出している礫もあった。

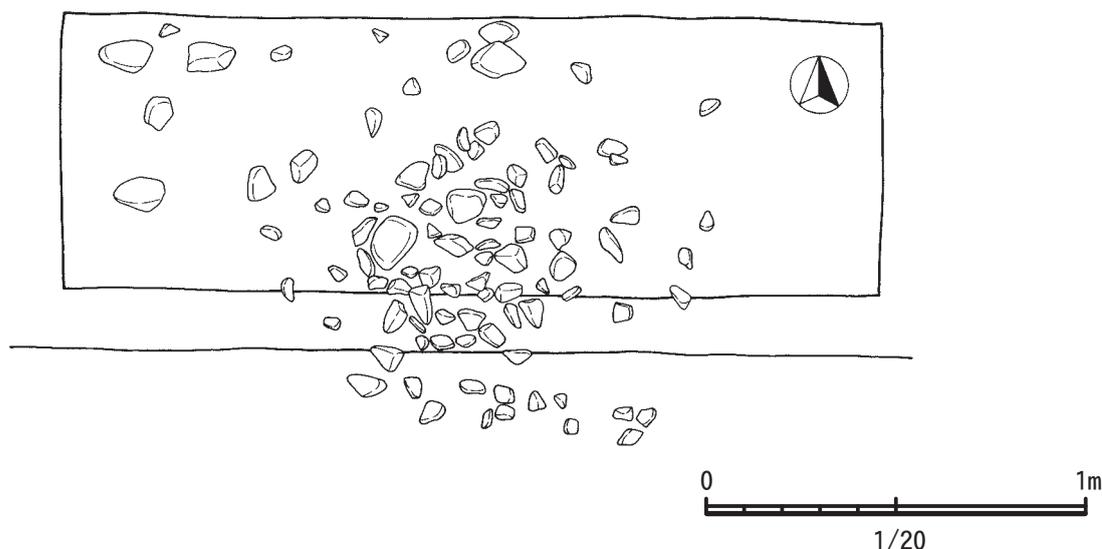


図96 集石遺構 5SQ01 平面図

### 4. 溝状遺構(16次調査)

台地の東側に3条の溝状遺構を検出した(図93)。詳細分布調査を開始した第4次調査で初めて検出し、その後も少しずつ調査を重ね、全体像を明らかにすることができた。

規模は最長のものはSD05で、沢と沢を繋ぐように長さ100mほど延びている。北側のIトレンチ(22)においては、幅1m、確認面からの深さは0.7～0.8mを測る。断面形状は、逆台形～U字状を呈する。

16次調査ではSD05の南側終点を把握するために発掘調査を実施した(図97)。(7)トレンチでは幅2m、深さ1mを測る。遺構内堆積土と壁面の分離は中世の遺構のように分離しやすいものではない。また、前述した壕とは異なり完全に埋没していて、上層に基本層序II層(十和田A降下火山灰)が傾斜に平行して堆積することから、この溝状遺構の年代は縄文時代に帰属する。

最も南側の(9)トレンチ(図98)では、木の根による攪乱もあり、2方向に分かれているのか、遺構が重複しているのか判断が難しかった。深さも表土から20～30cmと浅いことから、溝状遺構の末端部に限りなく近いと考えられる。

(6)トレンチでは現地表から約1.5mの深さの沢上の地形が形成されており、トレンチ壁面の土層を精査したが、遺構は認識できなかった。

ゾーン②のSD01がSD05と同じ方向を向いて延びていることから、同一遺構の可能性を考慮し、延長線上に(11)トレンチを設定し掘り下げを行ったが、遺構は確認できなかった。

遺物は遺構内や周辺でも発見されるが、図99が示すように、遺構を離れるほど遺物は少なくなる傾向がある。

SD05の東側にはSD09とSD15が検出されている。

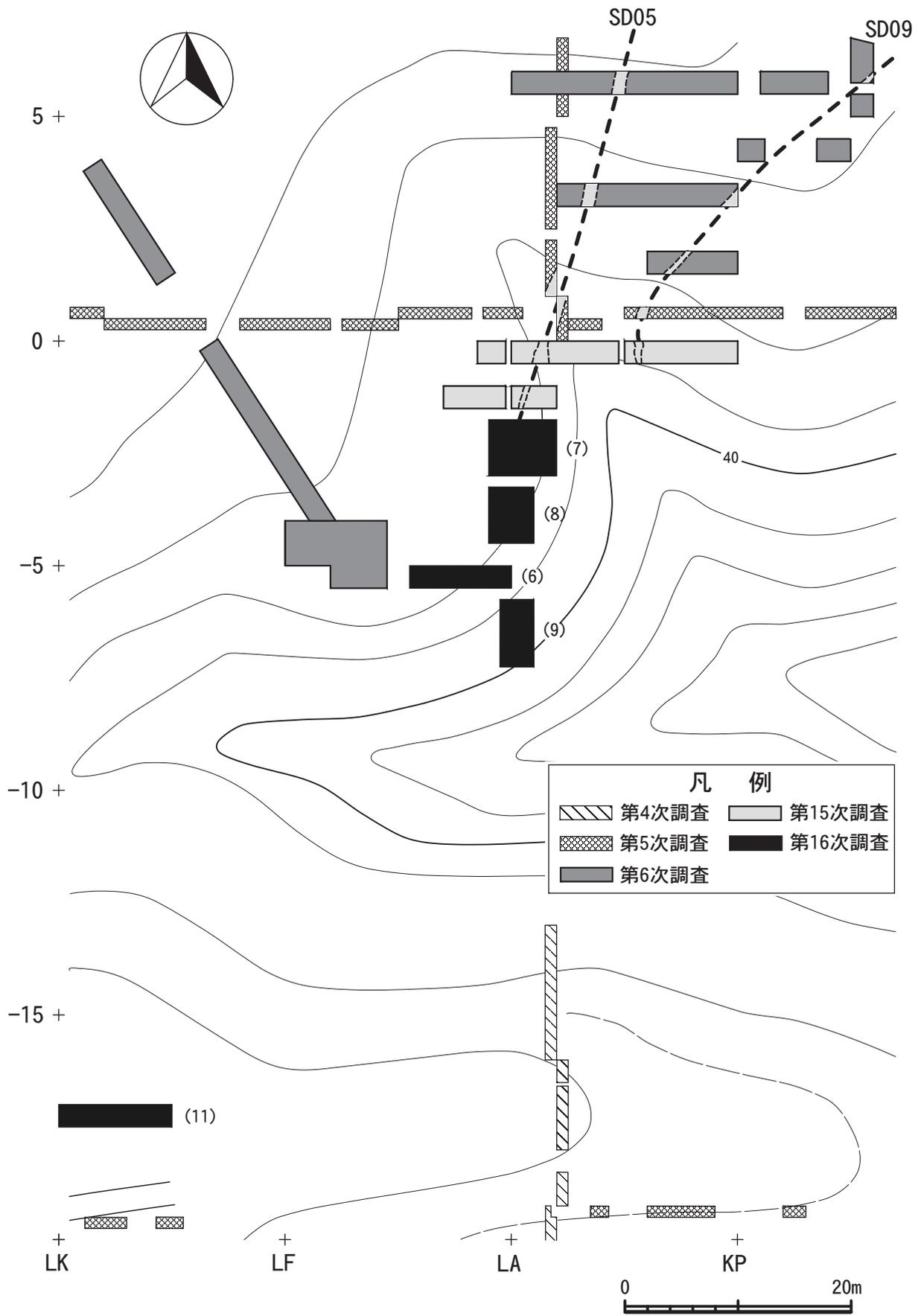


図97 第16次調査区設定図

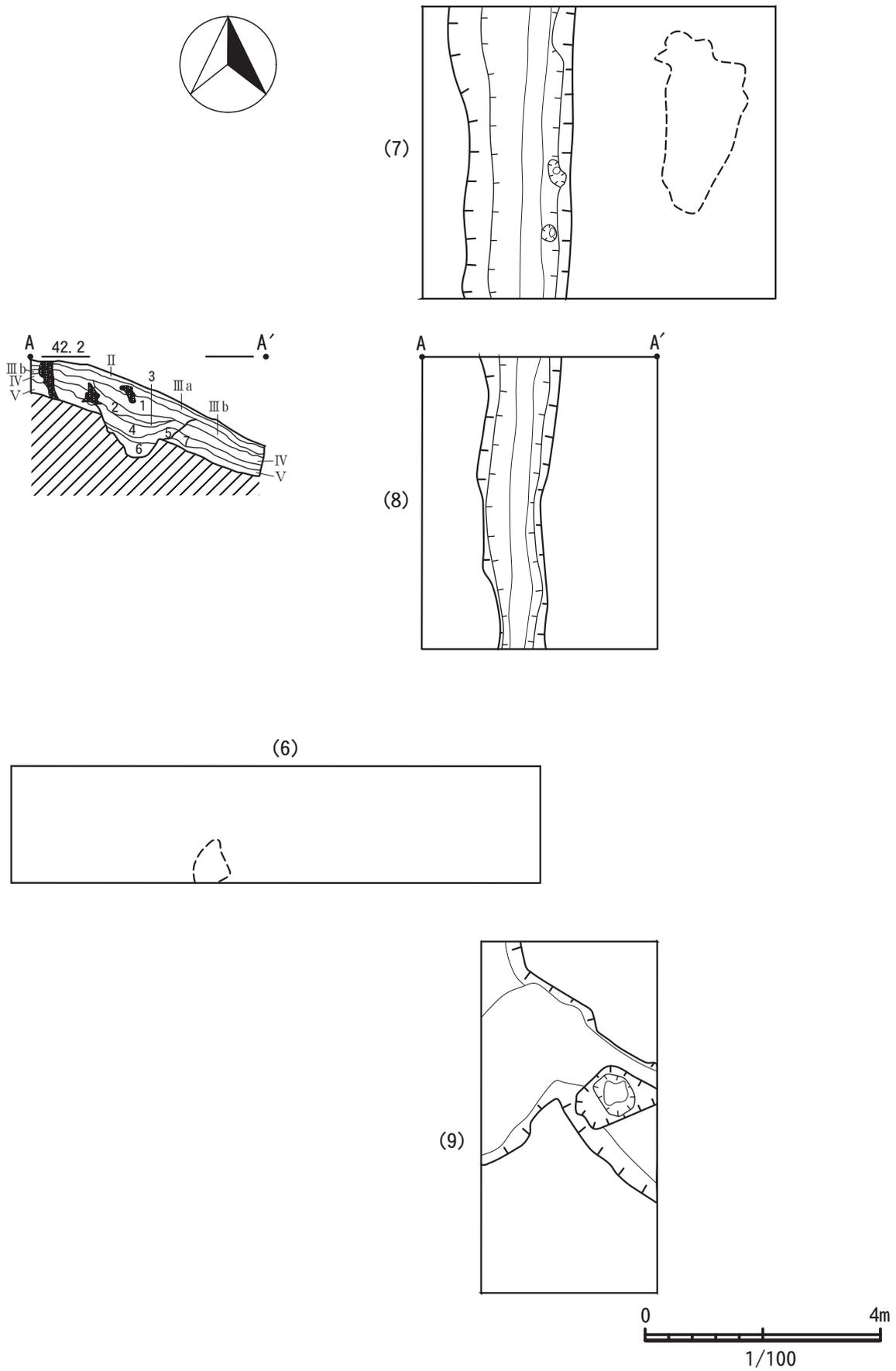
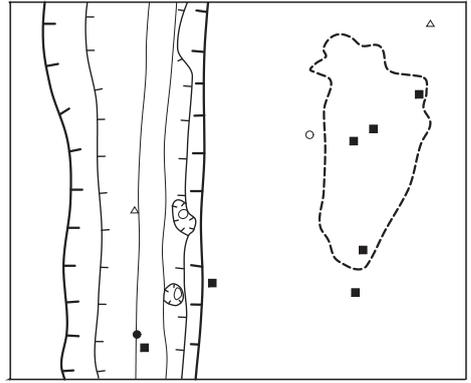


图98 沟状遺構 (SD05) 平面図・断面図

-2 +

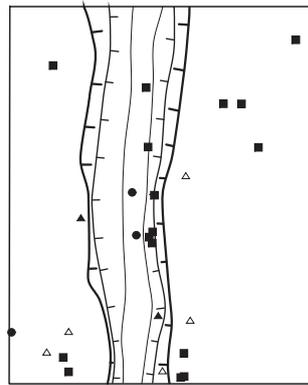


(7)



-3 +

(8)



-4 +

(6)

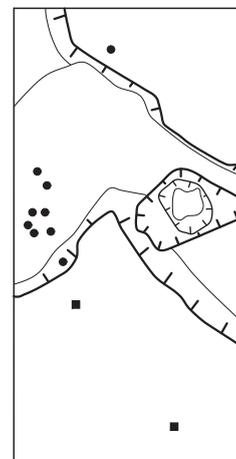


-5 +

-6 +

凡例		
● 土器	▲ 剥片	■ 礫
○ 土製品	△ 石器	□ 石製品

(9)



+ LD

+ LC

+ LB

+ KT

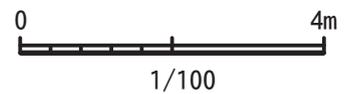


图99 溝状遺構 (SD05) 遺物出土狀況 (1)

SD09 は弧を描くように延びており、東側で二方向に分岐している。確認長80mを測る。半截をおこなったPトレンチでは幅1.0m、深さ0.4m、南端の15次(1)トレンチでは幅0.8m、深さ0.6mと非常に細くなる。断面形状はU字状である。

SD15 はもっとも東側になる。確認長約30mで、東側で2方向に分岐している。プラン検出のみで掘り下げは行っていないが、遺構の幅は0.8～1mを測る。

## 6. 出土土器

本調査区から土器は117点出土した。ほとんどは細片で、そのうち1点を図化した(図100)。

1は深鉢で、括れ部に無文帯を形成している。

## 7. 出土石器

本調査区から石器は18点出土した。そのうち1点を図化した(図101)。

### スクレイパー類

1・2は周縁を調整している。

### 磨製石斧

3はほぼ完形で、刃先が潰れている。

### 砥石

4は破片であり、片面に2条の溝を有している。

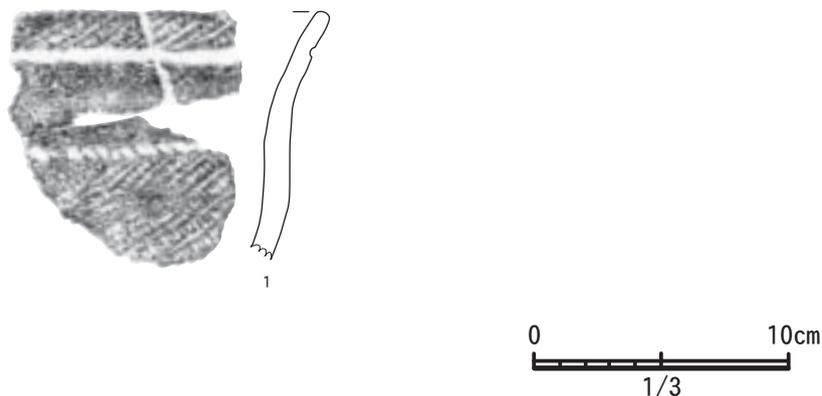


図100 第16次調査出土土器

挿図番号	器種	出土地点	層位	口径	底径	器高	器厚	特徴	分類
図100-1	深鉢	LJ18	Ⅲa	-	-	-	0.71	色調はにぶい黄橙色。胎土に砂粒を含む。	

表9 第17次調査出土土器

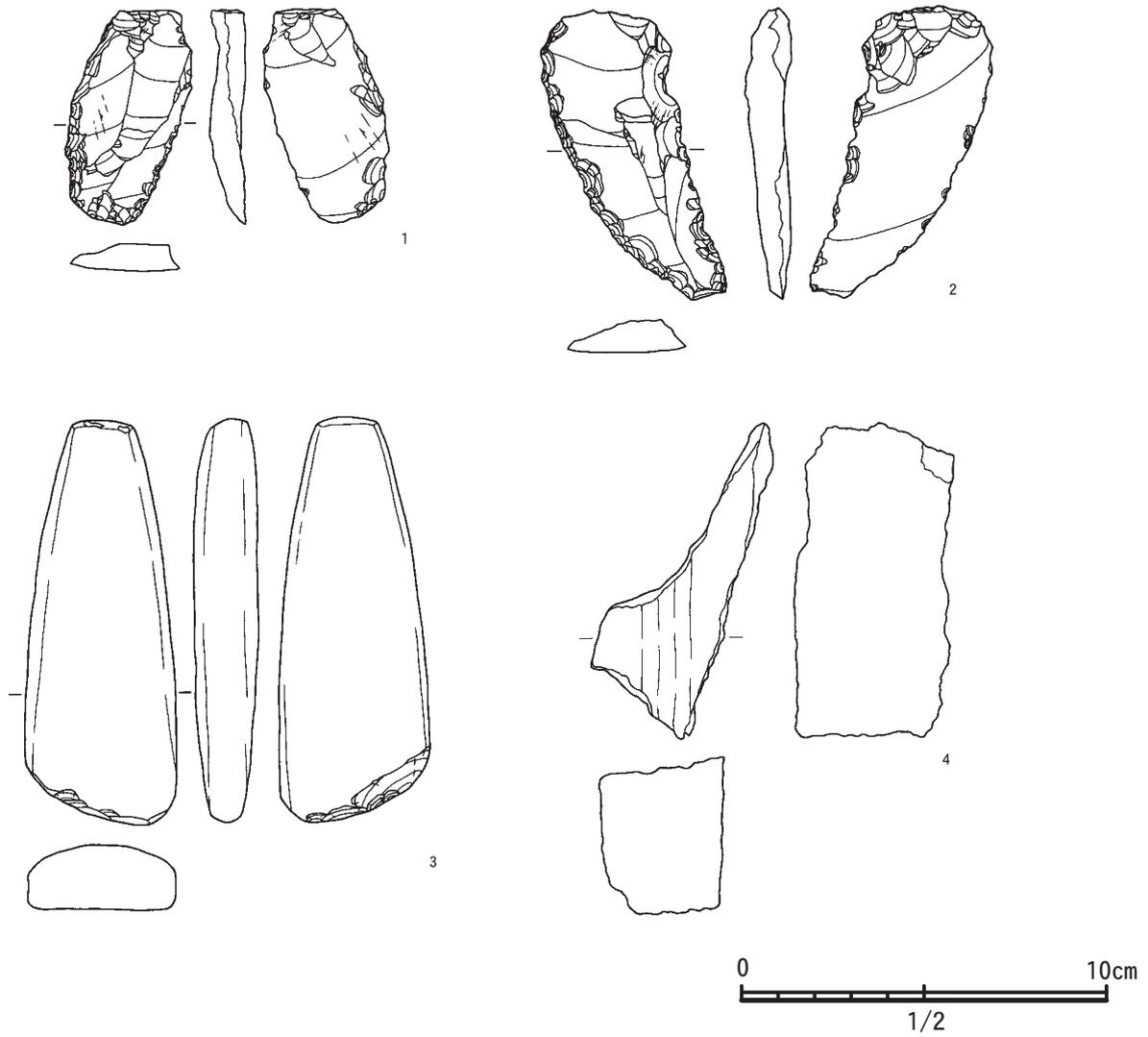


図101 第16次調査出土石器

挿図番号	名称	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石材	被熱	備考
図101-1	スクレイパー類	LA-6	Ⅲa	5.89	3.14	0.91	18.9	頁岩		
図101-2	スクレイパー類	LA-5	Ⅲa	6.82	3.54	1.16	33.0	頁岩		
図101-3	磨製石斧	LA-3	SD05	10.9	4.11	1.77	149.0	凝灰岩		
図101-4	砥石	LA-5	Ⅲb	4.58	3.21	4.24	89.4	砂岩		

表10 第16次調査出土石器

## 第6節 エリア②

遺跡の南東部にあたり溝状遺構を中心とした遺構が分布している。遺構も少なく、出土遺物は極めて少ない。

### 1. 溝状遺構

台地南東部で検出した(図103)。北東から南西方向に延びていて、規模は長さ約40m、幅0.4～0.6m、深さは確認面から約50cmを測る。基本層序IV層から掘り込まれている。遺構内堆積土は自然堆積の状況を呈する。エリア①-3のSD05と同様のもので、縄文時代のものである。遺構の延びる方向がエリア①-3のSD05と同様であることから、これらの遺構の中間でトレンチ調査を行ったが、遺構は検出できなかった。

### 2. 埋設土器

グリッドKT29で、溝状遺構SD01より約50m東に離れた地点で配石遺構を1基(4SR01)を検出した(図102)。

埋設土器の周囲に径約50cmの掘り込みがある。本遺構は沢頭に位置し、現地表面から確認面までは浅い。口縁部は欠損している。確認したレベルで掘り下げを止めているので、一部のみ採取した。磨消縄文で文様が描かれた土器である。

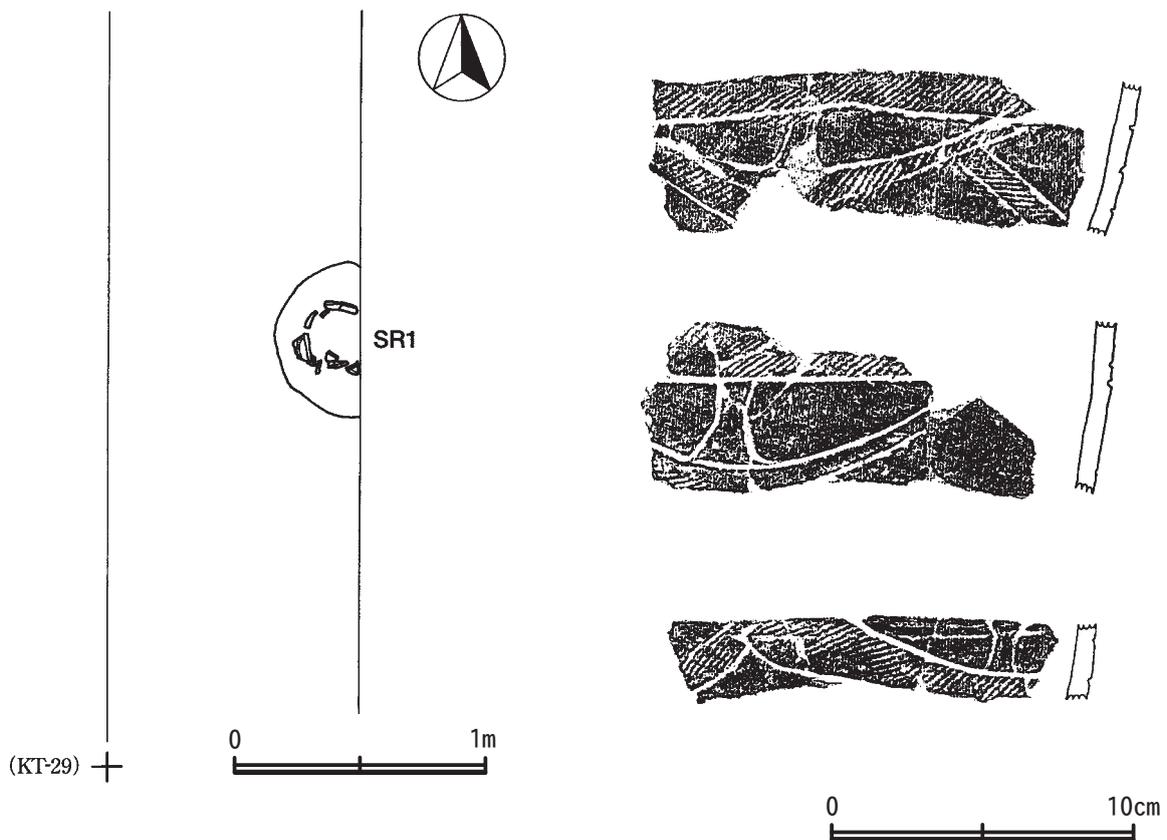


図102 4SR01 平面図

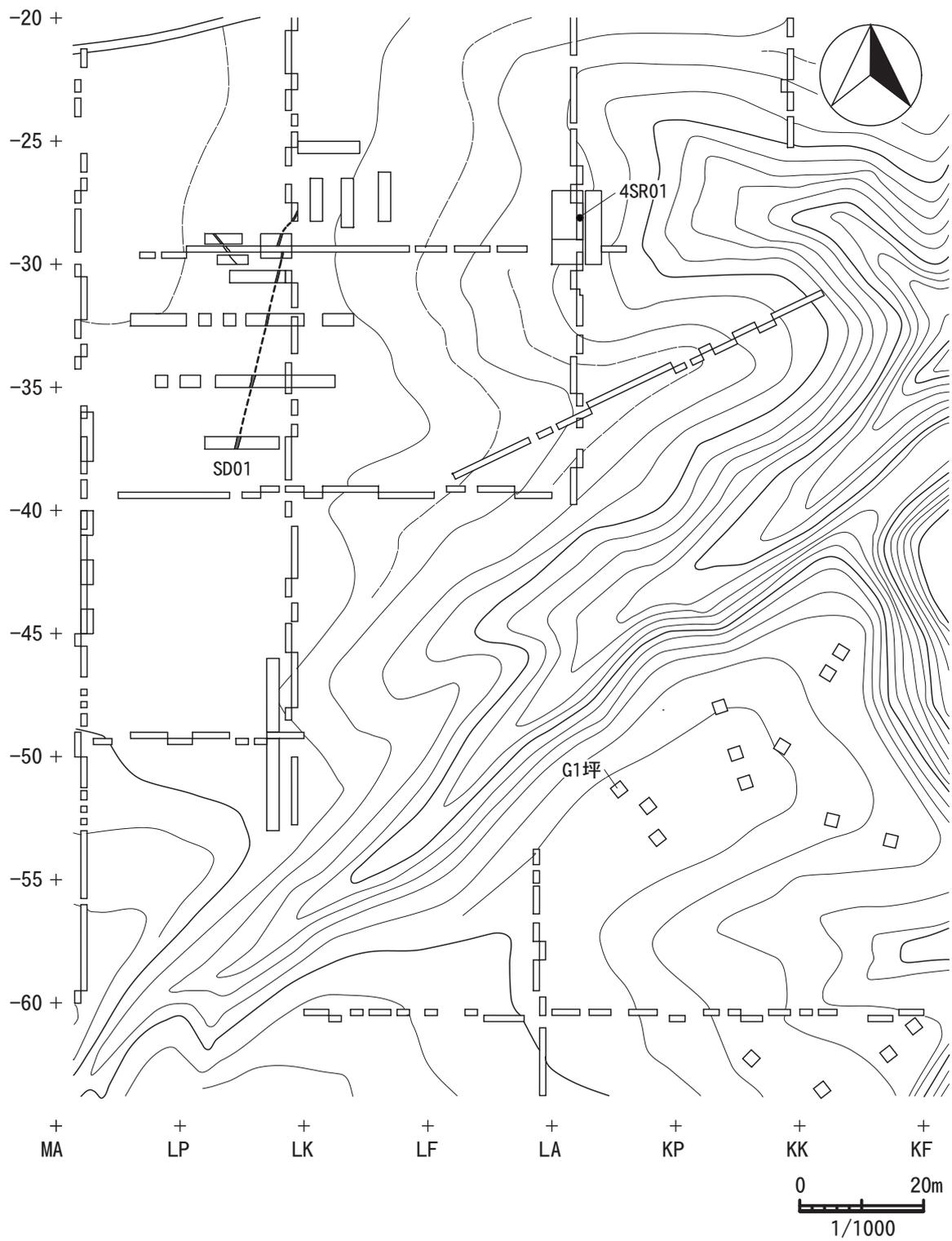


図103 エリア②遺構分布図

### 第7節 エリア③

遺跡南西部にあたる。遺物は少量出土しているが、遺構の分布は極めて少ない。土地利用の頻度は薄い、遺跡の範囲として考えられる区域である(図104)。5SKT02を検出していて、確認長0.9m、幅0.3m、掘り込み面からの深さ0.7mを測る(図105)。陥し穴で、この地区が狩猟場として利用されていたと考えられる。

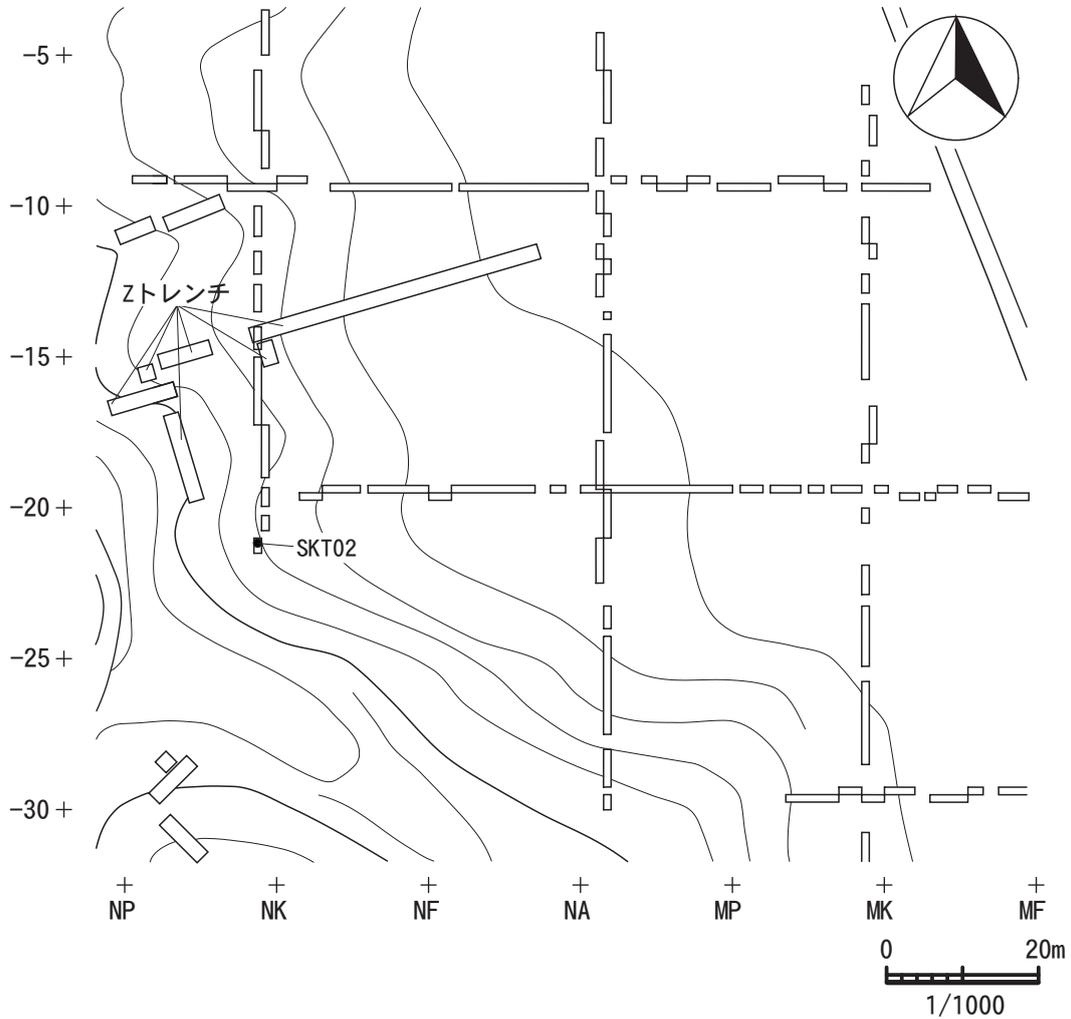


図104 エリア③遺構分布図

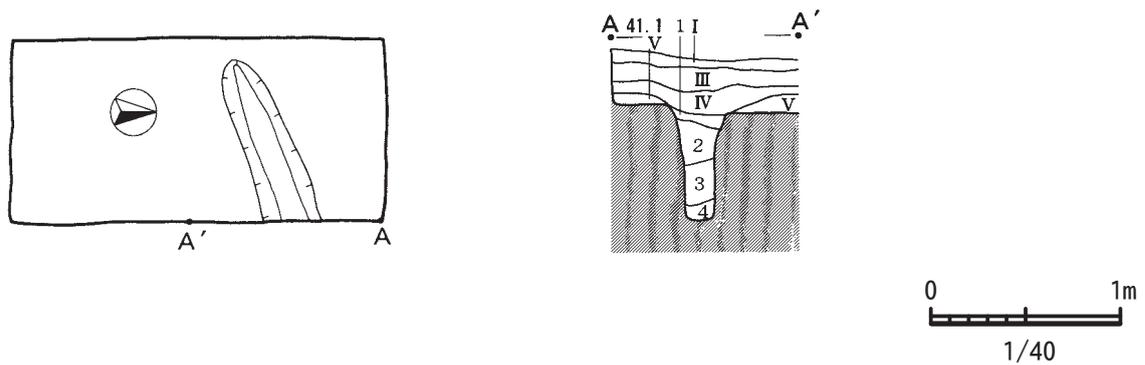


図105 5 SKT02 断面図

## 第4章 出土遺物

### 第1節 土器

出土土器は主体が縄文時代後期前葉に属する(図106~108)。器種は深鉢(1~13)、鉢(14~16)、壺(17~23)などが認められる。深鉢や壺は大型のもので高さが30cm程度で、それ以上の大型のものはほとんどない。

文様は入組文などの横位展開が主流である。4のように縦位に展開するものもみられる。沈線で描いたり、13のように半肉彫手法と呼ばれる隆帯を施文するものもある。文様施文技法は磨消縄文が多い。

壺を利用した切断壺型土器(22)はすべての調査次を通して3点確認されている(葛西2006)。

出土傾向はエリア①-1で量が多いが、特に環状列石C周辺が最も多い。

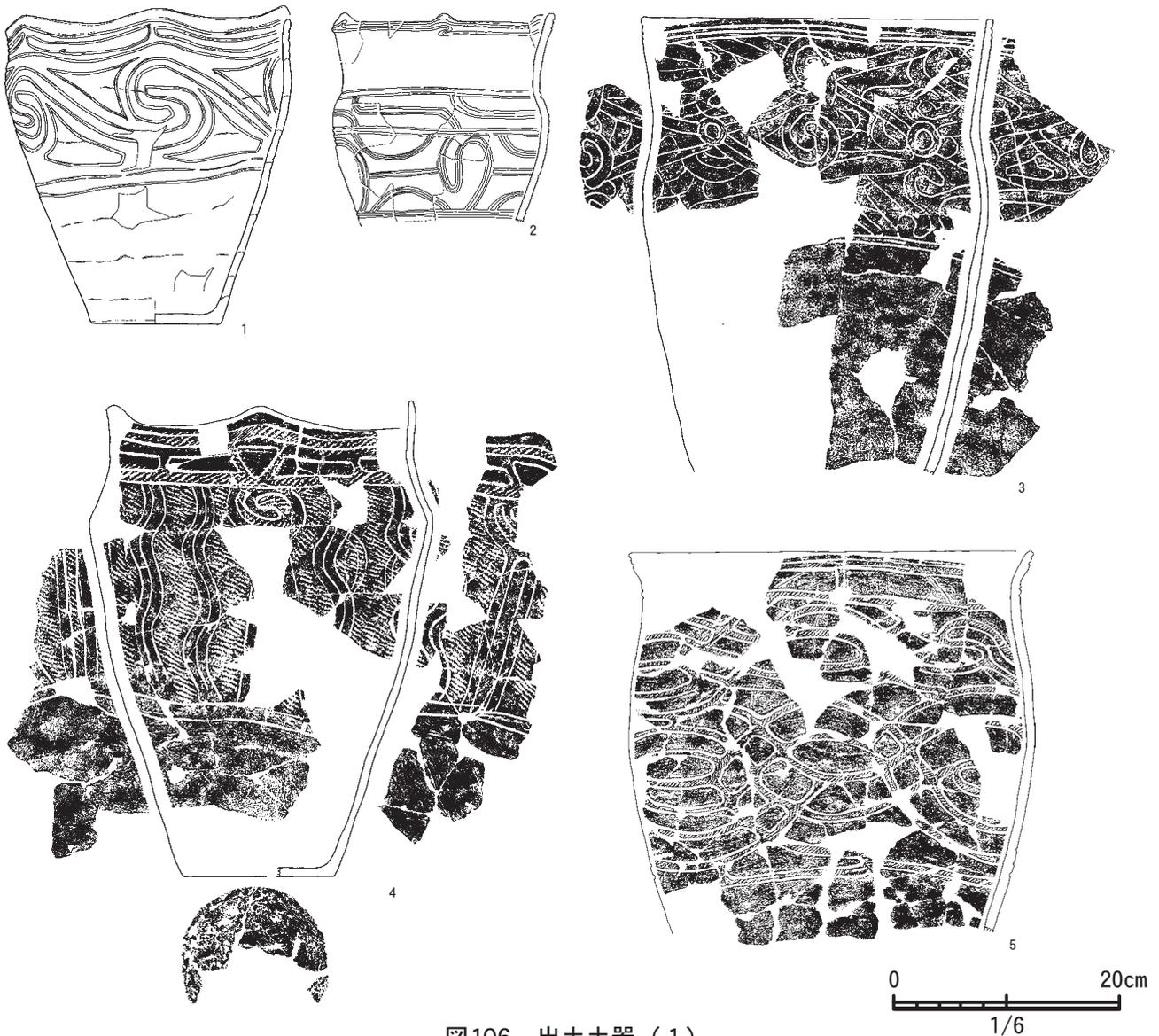


図106 出土土器(1)

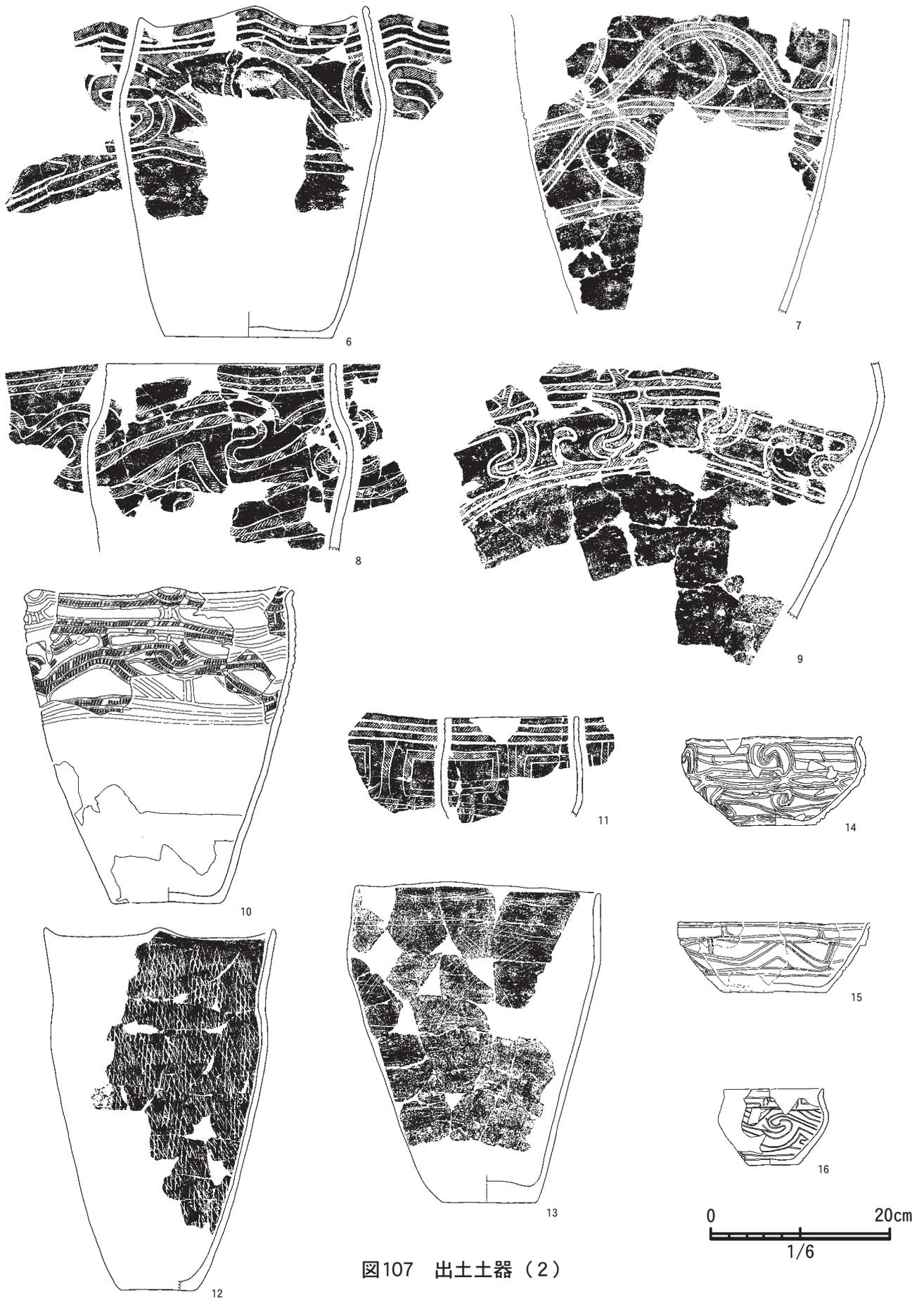


图107 出土土器(2)